

後原遺跡 6

－ 第25次調査 －

大野城市文化財調査報告書 第194集

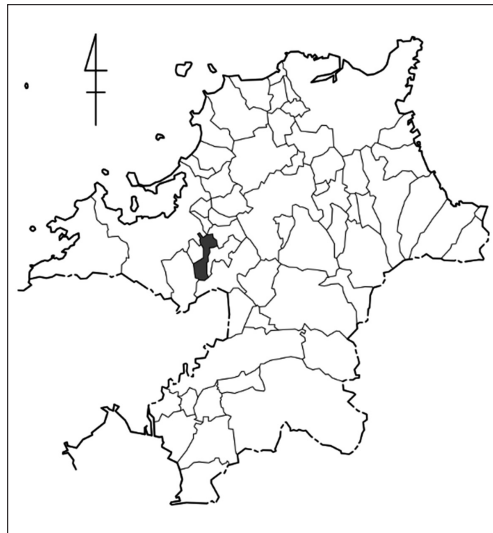
2021

大野城市教育委員会

うしろ ぼる
後 原 遺 跡 6

— 第25次調査 —

大野城市文化財調査報告書 第194集



序

福岡県大野城市は、福岡平野の南部に位置し、市域は中央がくびれ南北に細長い瓢箪形をしています。その市名は我が国最古の朝鮮式山城「大野城跡」に由来し、東部に大野城跡、中央に水城跡、南部に牛頸須恵器窯跡とそれぞれ国指定史跡を配し、それらを中心に数多くの文化財が残る歴史豊かな街です。

後原遺跡は市域のほぼ中央部、白木原1丁目一帯に所在する遺跡群で、主に中・近世の遺構が多く検出されています。文献によると一帯は江戸時代に栄えた白木原村があったところとされ、その端緒は16世紀の戦国時代にまでさかのぼるようです。白木原村は明治22年に他の村と統合されて大野村となり、現在の大野城市へと繋がって行きますが、第2次世界大戦後アメリカ軍のベースキャンプが置かれたり、近年では高層の集合住宅が濫立するなど、時々その姿を変えています。

この後原遺跡では、これまで25回の調査が行われ、江戸時代の屋敷跡やそれを区画する溝、共同墓地が確認され、現在の地祇神社を中心とした白木原村の様子が分かってきています。また、文献に現れる以前の中世の白木原村も一端を垣間見ることができるようになりました。

本書は遺跡の範囲の北辺にあたるところで実施した第25次調査の成果を収めた報告書ですが、当時の村の様子を更に明らかにすることができました。また、調査途中ではベース通りに面した商店等の様子を示す出土品があり、戦後の白木原の様子もうかがい知れます。

本書が学術研究はもとより、広く一般に周知され、地域史の解明や地域の文化財愛護精神の醸成の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、現地での調査及び報告書作成・刊行にあたりご理解ご協力いただいた株式会社大英産業をはじめ、関係各位に厚くお礼申し上げます。

令和4年3月31日

大野城市教育委員会
教育長 伊藤 啓二

例 言

1. 本書は福岡県大野城市白木原1丁目232番7、233番8・9・13・24・25・32に所在する後原遺跡第25次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は大野城市教育委員会が調査主体となり、事業主体者である株式会社大英産業の委託を受け実施した。
3. 本書で使用する実測図は遺構図を木原堯・澤田康夫が作成し、遺物実測図は小嶋のり子、白井典子、仲村美幸、津田りえ、松本友里江、氷室 優、古賀栄子、小畑貴子、篠田千恵子が作成したものを小嶋が製図した。
4. 本書で使用する写真は遺構を木原が撮影し、遺物写真は写測エンジニアリング(株)に委託し、牛嶋 茂が撮影したものを使用した。
5. 本書図中の方位は座標北を示し、座標は国土座標（第Ⅱ系）を使用している。
6. 本書で使用する遺跡分布図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図『福岡南部』を使用し、近隣市の遺跡包蔵地分布図を参考にした。
7. 本書の執筆・編集は澤田が担当した。
8. 本書掲載の遺物・写真・実測図は大野城市教育委員会で保管している。

本文目次

I. はじめに

- 1. 調査に至る経緯 1
- 2. 調査組織 1

II. 位置と環境

- 1. 遺跡の立地 3
- 2. 歴史的環境 3

III. 調査成果

- 1. 調査の概要 5
- 2. 遺構と遺物 6

IV. まとめ 9

挿図目次

第1図	調査地位置図（1/5,000）	2
第2図	周辺遺跡分布図（1/25,000）	4
第3図	遺構配置図（1/300）	5
第4図	SK01実測図（1/40）	6
第5図	各遺構出土遺物実測図	7
第6図	その他の出土遺物実測図	8
第7図	白木原ベース通り店舗配置略図	10

図版目次

図版1	調査区東半全景、西半全景
図版2	調査区細部、SD01、SK01、出土状況
図版3	出土遺物①
図版4	出土遺物②

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

調査対象地は大野城市白木原1丁目232番7、233番8・9・13・24・25・32に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地「後原遺跡」の隣接地にあっていた。

平成31年2月21日、事業者から対象地の埋蔵文化財に関する問い合わせがあった。当該地は当時、後原遺跡の隣接地であったが、試掘調査の結果、遺構が確認されたため、当該地は令和2年3月2日付で後原遺跡の包蔵地に追加した。

事業者は当該地において集合住宅建設を行う予定であり、計画通りに工事が施工されると遺跡が破壊されるため、協議を重ねたが、遺跡保護は設計上困難であることから、遺跡が破壊される部分について発掘調査が必要と判断された。その後、事業者から造成・建設予定図面を添えて93条に基づく届出を福岡県教育長あてに提出され、令和2年5月8日付で福岡県教育長から発掘調査の指示が出された。これを受けて、令和2年3月12日付で埋蔵文化財発掘調査の依頼書・承諾書が市に提出され、発掘調査は令和2年度、整理・報告書作成を令和3年度に実施することで協議が整い、協定書に基づき、年度ごとに委託契約を締結し事業を実施することになった。

調査面積は、対象地776㎡である。発掘調査は、令和2年5月22日～令和2年8月18日まで実施し、令和3年度に整理作業及び報告書作成を実施した。なお発掘調査及び整理作業に関する費用負担は、市と事業者とで折半した。

2. 調査組織

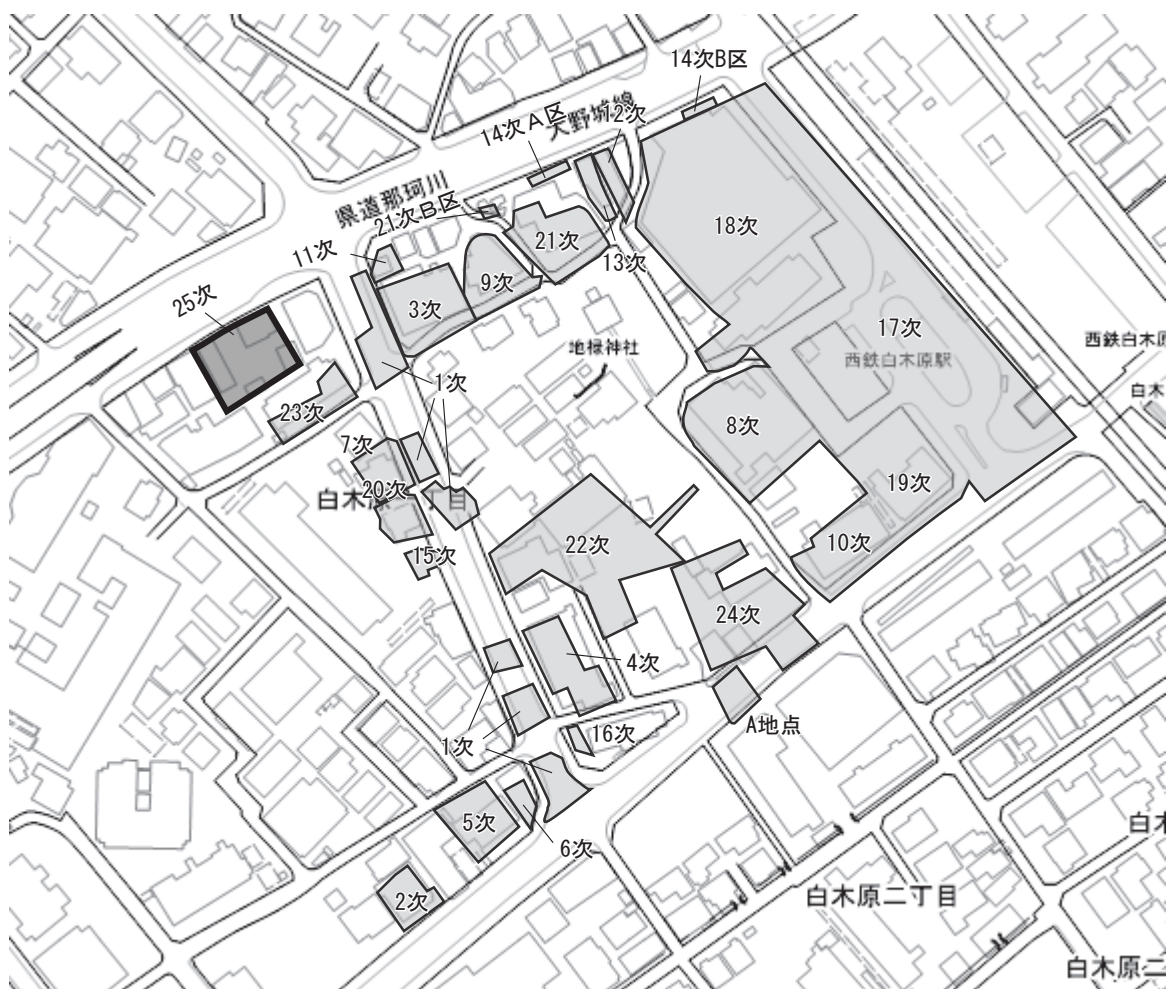
令和2年度の発掘調査及び令和3年度の整理作業における調査体制は以下の通りである。

令和2年度（発掘調査）

教育長	吉富 修				
教育部長	日野 和弘				
ふるさと文化財課長	石木 秀啓				
係長	上田 龍児	佐藤 智郁（～4月）	林 潤也		
主査	徳本 洋一				
主任主事	秋穂 敏明				
技師	山元 瞭平	齋藤 明日香			
会計年度任用職員（調査）	木原 克	澤田 康夫			
会計年度任用職員（庶務）	西村 友美	三好 りさ			
会計年度任用職員（現場作業）					
井口 るみ子	大浦 旗江	大藪 英美	金子 伸子	篠崎 繁美	綱嶋 年朗
仲前 富美子	仁田 幸男	深野 人美	船越 桃子	武藤 マリ子	山下 宏昭

令和3年度（整理作業）

教育長	伊藤 啓二	吉富 修（～6月）		
教育部長	日野 和弘			
ふるさと文化財課長	石木 秀啓			
係長	上田 龍児	林 潤也		
主査	徳本 洋一			
主任主事	秋穂 敏明			
主任技師	山元 瞭平			
技師	齋藤 明日香			
会計年度任用職員（調査）	澤田 康夫			
会計年度任用職員（庶務）	三好 りさ	光原 乃理子		
会計年度任用職員（整理作業）	小嶋 のり子	白井 典子	仲村 美幸	津田 りえ
	松本 友里江	氷室 優	古賀 栄子	小畑 貴子
	篠田 千恵子			



第1図 調査地位位置図（1/5000）

Ⅱ．位置と環境

1．遺跡の立地

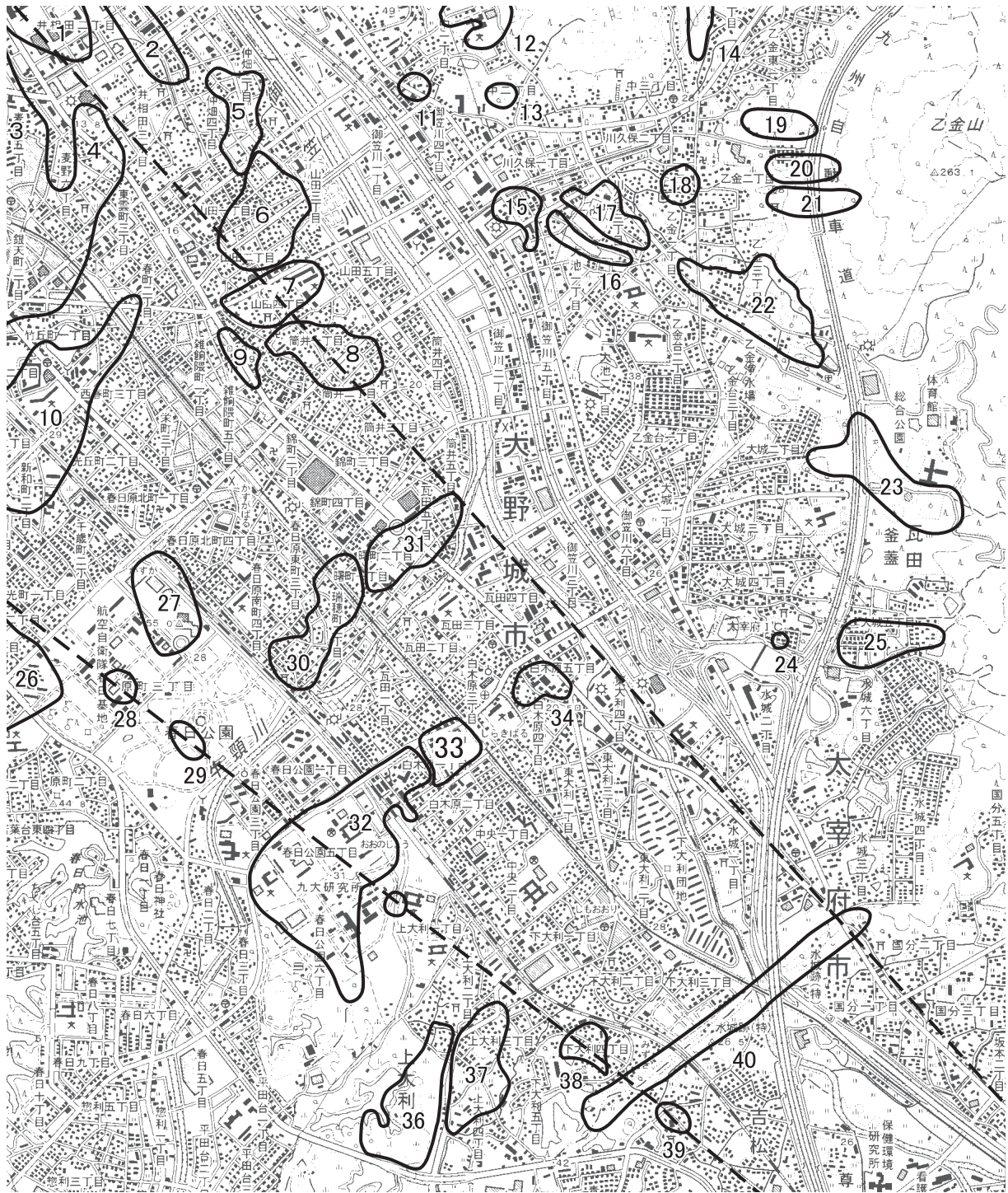
大野城市の位置する福岡平野は南・東をそれぞれ脊振山地、三郡山地に囲まれ、北は博多湾を介し玄界灘に面している。大野城市は、この福岡平野の東南部奥に位置し、東は乙金山山塊とそこから南西に派生する低丘陵群、南部は脊振山系の一角を成す牛頸山とそこから開析の進んだ低丘陵群に挟まれ、中央には御笠川の活動による沖積地及び氾濫原の低地が所々に微高地を形成しながら広がっている。また、御笠川の支流である牛頸川や平田川などの中小河川により一帯は沖積平野が形成されているが、後原遺跡はこの氾濫原堆積層を基盤とする微高地上に立地する。

調査地は瓢箪形に例えられる市域のほぼ中央部、春日市境近くに位置し、現在の町名では白木原1丁目一帯にあたる。この一帯は古くから宅地化が進み旧地形の改変が進んでいて、旧状を想像するのは困難だが、昭和初期までは小高い丘状になっていて現況より数mほど高かったようである。

2．歴史的環境

後原遺跡では、石器から中近世陶磁器まで、その多寡はあるものの周辺の歴史の流れを示す遺物が出土している。ここで、遺跡周辺の概観にふれておこう。

石器・縄文時代の遺跡は少なく、原ノ畑遺跡、石勺遺跡で散発的に遺物が認められる。弥生時代になると、遺跡は市域北部に多く、周辺でも石勺遺跡や御供田遺跡で遺構が見つかるが、市域南部にかけて遺構の出現度は低い。続く古墳時代では、首長墓級の前方後円墳は見つからないが、御陵古墳群から三角縁神獣鏡の出土が伝えられており、初期の地域の有力者の存在が窺える。中期には30m級の円墳の笹原古墳が営まれるが、帆立貝式古墳の成屋形古墳と共に御笠川中流域の盟主的な勢力の存在を示している。古墳時代後期になると周辺の山麓には、いわゆる「群集墳」が数多く営まれる。善一田古墳群、王城山古墳群、本堂古墳群、中通古墳群などがあり、梅頭遺跡では須恵器窯を転用した墳墓が見つかる。集落遺跡としては、仲島遺跡、石勺遺跡、村下遺跡などが弥生時代から継続して営まれる他、瑞穂遺跡、原ノ畑遺跡などが新たに出現する。中期ごろ遺跡は一旦減少するものの後期になると塚原遺跡、日ノ浦遺跡、上園遺跡、薬師の森遺跡などで集落が展開する。また、南部の牛頸山麓では須恵器窯跡群が操業を開始し、奈良時代にその最盛期を迎え、9世紀後半ごろまで操業される。中世になると御笠の森遺跡や宝松遺跡、薬師の森遺跡で遺構が見られるが、御笠の森遺跡や宝松遺跡では区画溝を伴う屋敷跡等が見つかり、御笠の森遺跡では方形区画が連続して見つかり、集落の構成を知る貴重な遺跡である。近世になると、中世に萌芽を持つ御笠の森遺跡、雑餉隈遺跡、宝松遺跡、後原遺跡、御供田遺跡など明治22年に成立する大野村を構成する主要な集落として規模を増していく。特に後原遺跡を主体とする白木原村は集落域、墓地、中心的な神社などその景観復元が可能になりつつある。また、近現代の遺構が後原遺跡、雑餉隈遺跡、王城山遺跡などの調査で防空壕や米軍基地、ベースキャンプ通りの遺構など、発掘調査の俎上に乗るようになり、とりわけこの一帯の近現代、戦後も含めての遺構遺物についても本市の特徴的な歴史を知る上でも注視していく必要がある。



1. 井相田C遺跡 2. 仲島遺跡 3. 麦野A遺跡 4. 麦野B遺跡 5. 川原遺跡 6. 御笠の森遺跡 7. 宝松遺跡
8. 村下遺跡 9. 雑餉隈遺跡（大野城市） 10. 雑餉隈遺跡（福岡市） 11. 塚口遺跡 12. 御陵古墳群
13. 御陵前ノ椽遺跡 14. 唐山遺跡群 15. ヒケシマ遺跡 16. 中・寺尾遺跡 17. 森園遺跡 18. 松葉園遺跡
19. 善一田古墳群 20. 王城山古墳群 21. 古野古墳群 22. 薬師の森遺跡 23. 雉子ヶ尾遺跡 24. 笹原古墳
25. 釜蓋原遺跡 26. 立石遺跡 27. 駿河遺跡 28. 先ノ原遺跡 29. 春日公園内遺跡 30. 瑞穂遺跡 31. 石勺遺跡
32. 御供田遺跡 33. 後原遺跡 34. 原ノ畑遺跡 35. 池田遺跡 36. 本堂遺跡 37. 上園遺跡 38. 谷川遺跡
39. 島本遺跡 40. 水城跡 41. 官道（水城西門ルート） 42. 官道（水城東門ルート）

第2図 周辺遺跡分布図（1/25,000）

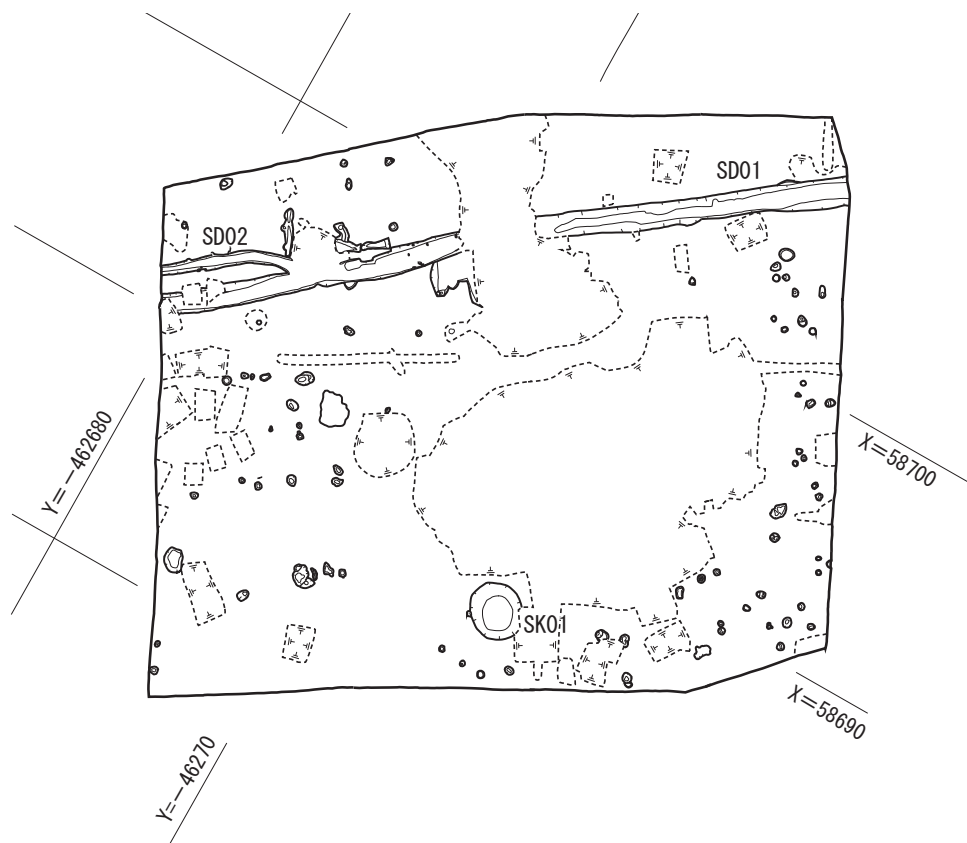
Ⅲ. 調査成果

1. 調査の概要

後原遺跡は大野城市域のほぼ中央に位置し、大野城市白木原1丁目周辺に広がる近世を中心とした集落遺跡である。これまでの24次の調査から、「筑前国続風土記拾遺」に記された白木原村の本村と考えられ、近世集落の景観を考える上で貴重な遺跡である。

第25次調査の調査区は大野城市白木原1丁目232番7、233番8他に所在する。県道那珂川大野城線沿いに位置し、調査した面積は約776㎡である。周辺で過去に行った1次調査、3次調査、7次調査、23次調査区では近世墓が確認されており、本調査でも近世墓の存在が想定された。

調査は排土置き場の都合上、二回に分けて、まず東側を、その後反転して西側を調査した。調査の経過としては、5月22日から重機により東側の表土剥ぎを始め、6月1日から作業員を投入して遺構検出と遺構掘削を行った。遺構掘削を完了し、9日に写真撮影を、その後遺構平面図を作成した。6月29日から7月21日にかけて重機により反転作業と西側の表土剥ぎを継続して行った。7月20日から作業員を投入して、遺構検出と遺構掘削を行い、遺構を完掘後清掃して8月3日に全景の写真撮影を行った。その後遺構平面図を作成し、8月18日に機材等の撤収を終わり調査終了とした。調査の結果、調査地の中央に大きく攪乱を受けるなど、近現代と思われる攪乱が著しく、検出した遺構は少ないが、土坑、溝状遺構、ピットを確認した。遺物は陶磁器片、土師器片が出土した。また攪乱土中からベースキャンプ通りに関わる遺物が出土している。



第3図 遺構配置図 (1/300)

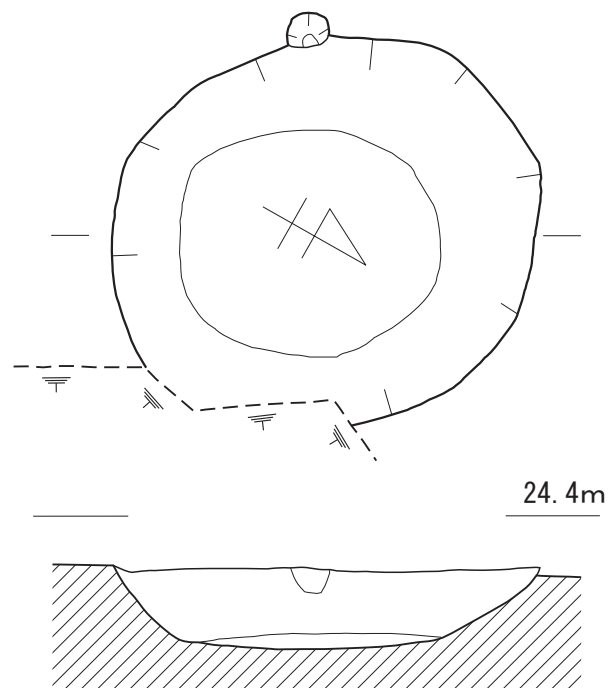
2. 遺構と遺物

調査区の大略2分の1は現代の重機による攪乱で、近世以前の遺構面は僅かに残るだけであった。攪乱を受けていない遺構面でも顕著な遺構は無く、検出遺構の密度も疎で、調査した位置が、所謂白木原村の北はずれの様相を物語るようである。検出した遺構は、土坑1基、東西に向く溝状遺構が2条、ピット群である。ピット群の性格は不明だが、調査区南西部で検出したものは、表土剥ぎ途中でも確認したが、ほとんどが木の根によるものである。以下、検出した遺構について述べる。

(1) 土坑

SK01（第4図、図版2）

調査区南辺の中央部で検出した土坑で、ほぼ正円形に近いプランを呈する。東側は攪乱を受けるが、ほぼ形状は知られる。径約2.2mで、完掘後の深さは約42cmである。遺構検出時、埋土はドーナツ状をしており、黒色土と灰質の黄白色土が混じった埋土の中央に、更に円形の黒褐色土が埋まっていた。検出時にはその形状から近世墓を想定して掘り進めたが、予想以上に浅く、その断面は凸レンズ状を呈するものであった。埋土の断面は、ちょうど、卵の白身と黄身のような断面をしている。土坑の性格は不明であるが、これまでの後原遺跡の調査でも、埋土を含めて同様な土坑が見つかり、今後の検討課題である。出土遺物は磁器類がある。



第4図 SK01実測図（1/40）

出土遺物（第5図、図版3）

本遺構からは出土した遺物は少なく、磁器の小片が出土したのみである。一角を新期の重機による攪乱が及んでいて、混ざり込みの可能性もある。

染付（1・2）猪口あるいは小杯の口縁部片である。1は直立気味の口縁端を小さく丸める。内外とも光沢のある白色釉がかかり、外面には口縁部に圏線を一条回し、細い線で草花文、亀甲文が描かれる。2は薄く尖り気味の口縁片で、乳白色の釉がかけられ外面に圏線が一条廻り、竹文様の断片が認められる。

白磁皿（3）高台部の小片である。断面三角形の小さな高台がつくが全様は知れない。白色の精良な胎土にやや緑味を帯びた乳白色の釉が厚めにかけてられるが、高台畳付は釉剥ぎされ、高台内中心付近は施釉されない。

磁器皿（4）波状口縁の小皿である。扁平気味の浅い皿で、全体に比して大きめの高台がつく。白色で細黒粒を含む胎土で、厚めのオリーブ色の釉を全体に施すが、高台畳付部分は釉剥ぎしている。見込みに白粒を吹き付けて勾玉様の文様を描き、中にオレンジの点を入れる。高台内中央

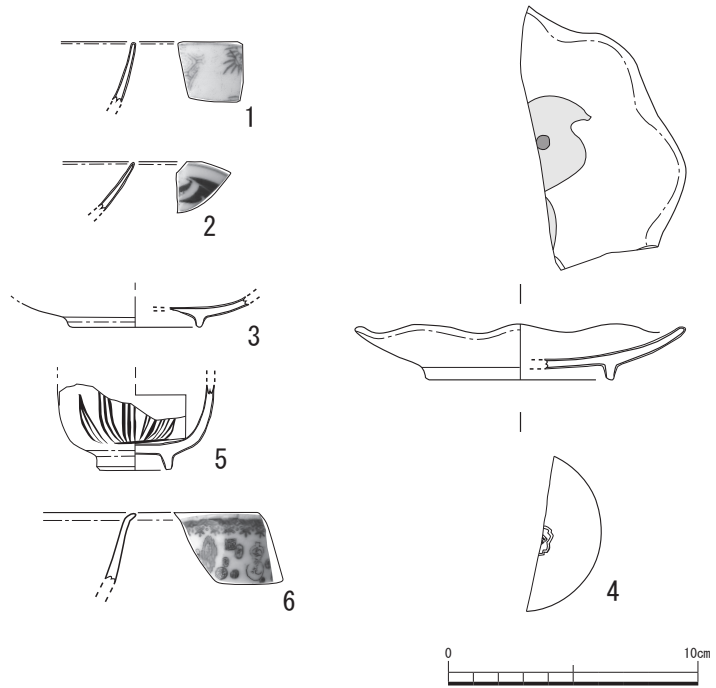
には朱線による桜花枠内に文字が入る銘款があるが、全様は不明。

(2) 溝状遺構

調査区北辺に東西方向の二条を検出した。両端とも調査区外へ延びる。

SD01 (第3図、図版2)

ほぼ直線的に延びる東西溝で、幅は約0.8m～1.2m、深さは西端で約10cm、東端で40cmを測る。断面はレンズ状を成し、埋土は黒茶色土である。溝底のレベルは東側が低くなっており、水流は西から東へ向かうと思われる。出土遺物はほとんど無く、土師器の杯か小皿の細片が出土したが、図化できなかった。



第5図 各遺構出土遺物実測図

SD02 (第3図、図版2)

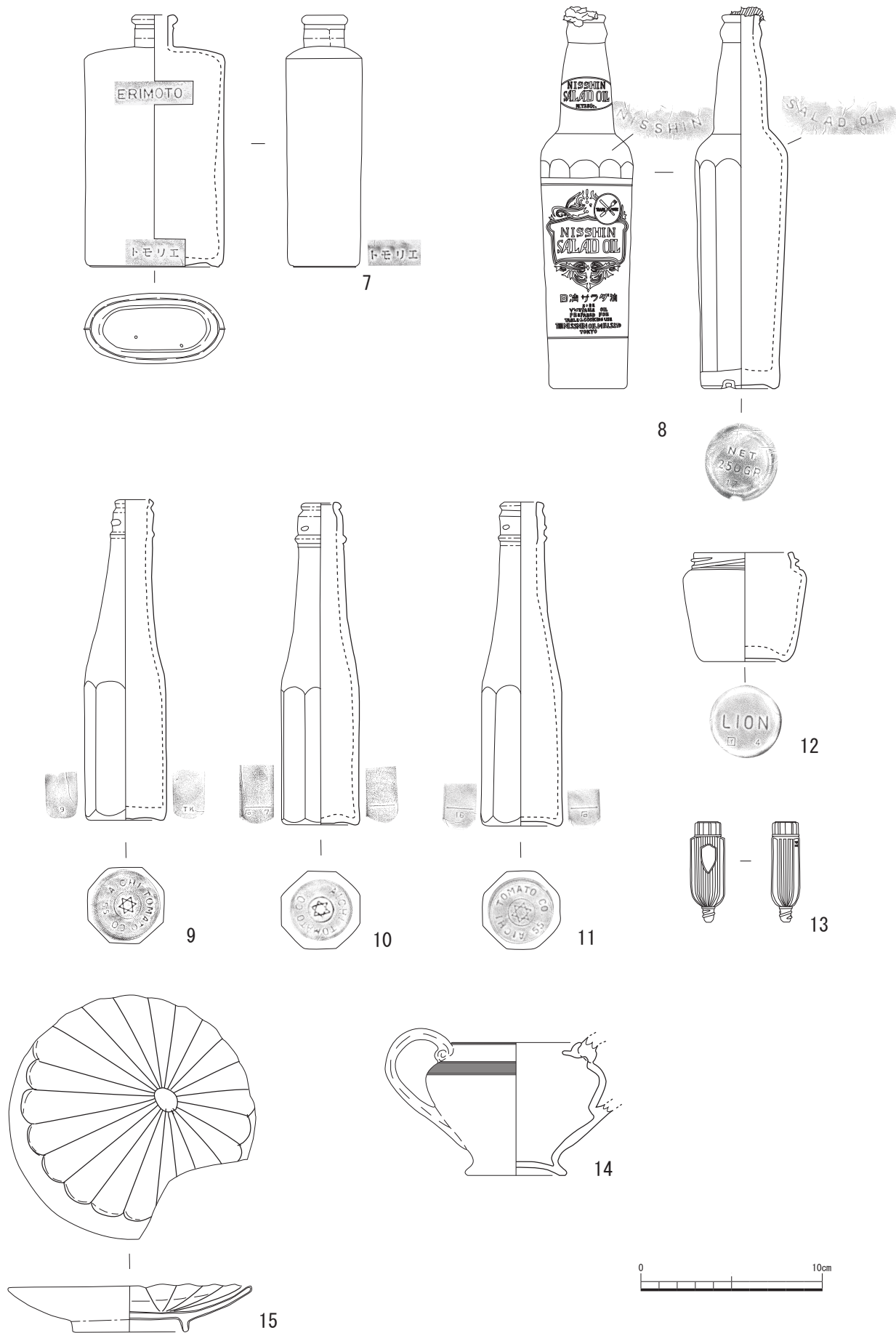
調査区の西端で、SD01の北隣に検出した溝状遺構で、幅約50cm、深さは最深で30cmを測る。溝は東方向へS字に湾曲しながら進み、調査区端から約5mの所でSD01を切る形で合流する。溝は調査区中央部で重機による攪乱を受けていたが、これより東側ではSD01とSD02の区別が不明瞭となる。浅い溝なのでSD01の上層上で消滅するものかと思われる。断面は逆台形を呈し埋土は黒色土である。遺物は磁器が出土した。

出土遺物 (第5図、図版3)

出土遺物は少なく、遺構検出時では検出面に板ガラスの破片が残るなどしており、それらが本溝の伴う可能性もあるが、上層の土の取り残しと考えた。以下、出土した磁器について述べる。染付(5・6)5は小杯の底体部片である。底部から屈曲し、直立気味に立ち上がる体部で、口縁部を欠く資料である。断面長方形のやや高めの高台と底部は全容を残す。高台内を含め全体に白釉がかけられるが、外面はやや緑味を帯びる。高台畳付は釉剥ぎされる。胎土は白色で細粒の混入はなく精緻である。外面に笹の葉状の草花文を描き、対面にも文様を描くが、意匠は不明である。内底砂粒と目跡が一か所残る。6は猪口の口縁部片である。直立気味の体部で、口縁端部を丸く外方へ折り曲げる。口縁外面に花繫文を廻らし、体部に丸や四角で囲んだ「福」「壽」「吉」「印」などのスタンプを押す。それらの間に瓢箪で囲む「雪勿花」が入れられる。明治以降の物か。

(3) ピット群

調査区では攪乱を免れた遺構面にピットを確認した。いずれも径20～40cmの円形プランで、建物等を構成するものではない。遺構密度も疎で、特に調査区の東南隅のピット群はほとんどが木の根によるものである。出土遺物は無い。



第6図 その他の出土遺物実測図

(4) その他の出土遺物

既述しているように、調査区内は近現代の攪乱が広く及んでいて、新しい時期の遺物が掘り出されたが、中でも、南東部角に黄色砂質土の埋土の攪乱があり、ガラス製品、陶磁器などが一括廃棄されていた。また、調査区北東一帯では、注射器、アンプル、薬液を入れたと思われる小ビンなどが出土した。これらは通称“白木原ベース通り”にあった店舗等に由来するものと思われ、一部を図化し、概要を記述する。但し、注射器等については汚染の恐れがあり、取り上げなかった。

出土遺物（第6図、図版4）

ガラス製品

瓶（7～13）7は胴部が楕円形で、小さく直立する口が付く。透明なガラスで、小さな気泡が認められる。肩部片側面に「ERIMOTO」、底部両側面に「トモリエ」の文字が刻まれる。8は高さ25cm程の細身の瓶である。肩部付近まで面取りされる。口には王冠が部分的に残る。透明の瓶で、体部、口頸部に夫々白色塗料により日清サラダ油のラベルがプリントされる。また、肩部に「NISSHIN SALAD OIL」とエンボス加工される。9～11は外底部にカゴメマークの付いた透明ガラスの瓶で、高さ20cmを測る。ケチャップ等調味料を入れた同一目的の瓶である。全体として歪みがあるが、いずれも中位で窄まり口に至るもので、下半は面取りされる。成形において10・11は縦断を貼り合わせた線が残るが、9は認められない。また、外底部は六星の廻りに「TOMATO CO 55 AICHI」と書く9・11に対し10はCOとAICHIの間に数字は無い。12は透明感のあるオリーブ色の広口の容器である。頸部にネジが刻まれ、外底に「LION、□、4」がエンボス加工される。13は両口点眼式目薬瓶で、スポイト部のゴムを欠くが、点眼部のキャップまで残る。

陶磁器

陶器（14）両耳のポットである。全体は白色で、肩部に金線で挟んだコバルトの帯を廻らし、口縁端部外面に金線を一条廻らす。凹レンズ状の底部に緑色塗料でスタンプがある。

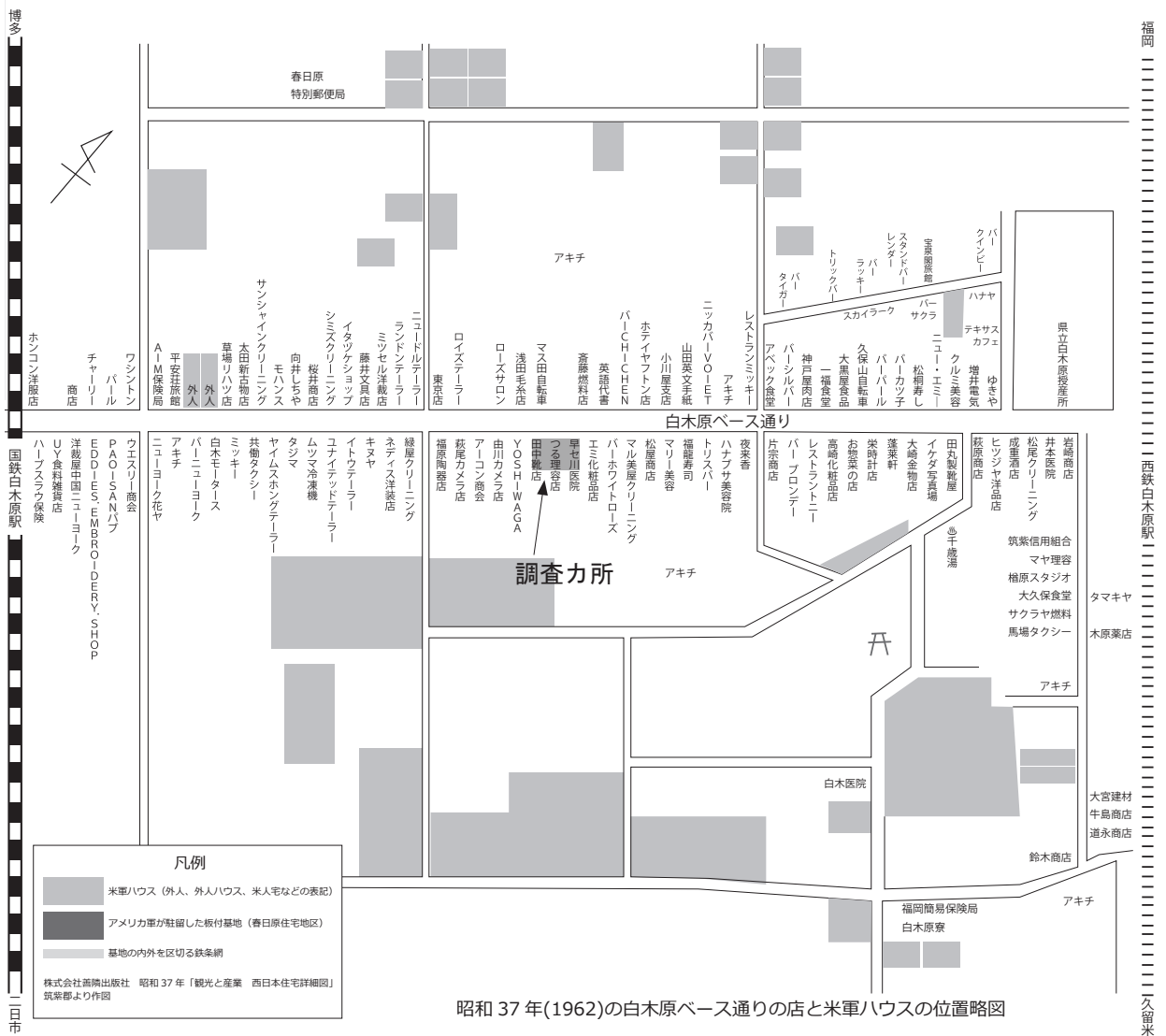
磁器（15）棕櫚文を半分型作りする皿である。棕櫚の葉の半分を花卉状の口縁にし、半分は平滑な弧を描く口縁としている。葉弁をコバルト顔料で引き、肉厚としている。全体に青味を帯びた白色釉をかけるが、高台畳付部は施釉しない。

IV. まとめ

ここで、今回の発掘調査成果に基づき若干のまとめをしておきたい。すでに述べてきたように今回の調査では、調査区の相当部分を新期の攪乱により、遺構はほとんど検出できなかったが、検出した東西溝について触れておきたい。調査の内容で述べたとおり、本溝の時期を明確にする遺物は少ないが、土師器小片や溝の埋土を見る限り江戸期にまで遡りうると考える。また、溝の北側は堅く締まっており、道路状のものが考えられた。通称“白木原ベース通り”と並行するように伸びるが、“白木原ベース通り”は、現道路拡幅に伴い、当時の店舗地が5～6m切り取られており、その位置から見て、“白木原ベース通り”が建設される以前の遺構であるのは間違いない。一方、1・3・23次調査で確認された近世墓群は本調査区では検出されず、墓地の北限がほぼ確定できた。また、今

回調査区の遺構密度が疎であることを考え合わせると、今回調査地点は近世白木原村の北のはずれと考えられ、検出した東西溝は白木原村の北を限る道路の側溝と考えられないだろうか。今後の周辺調査の成果を待ちたい。

ところで、本調査では近現代の遺物も取り上げた。太平洋戦争後米軍の進駐があり、アメリカ兵とその家族のための「春日原住宅地区」が造られ昭和23年にこの東門から西鉄白木原駅間に道ができると、アメリカ兵相手のさまざまな店舗が並んだ。今回調査した地点は第7図に示すとおり、「早七川医院」とその両隣付近であり、店舗の内容を示すような昭和20年代の出土品があって、賑わいの一端を窺い知れる。近現代の遺構・遺物は埋蔵文化財の対象になりにくいのが、本市の特徴的な歴史資料として、また中近世の白木原村のその後、現在に至るまでの通史を組み立てる上でも今後注意して調査に臨む必要がある。



第7図 白木原ベース通り店舗配置略図 (大野城市の文化財 第51集より)

圖 版



調査区東半全景



調査区西半全景